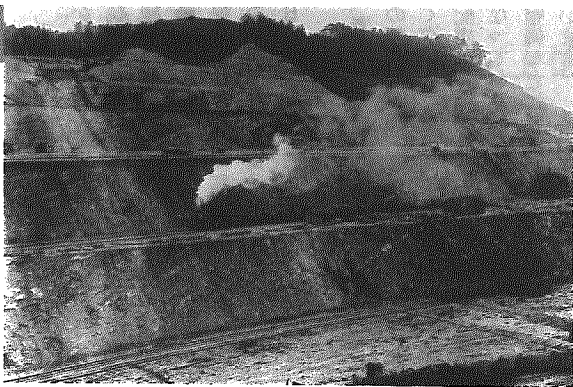


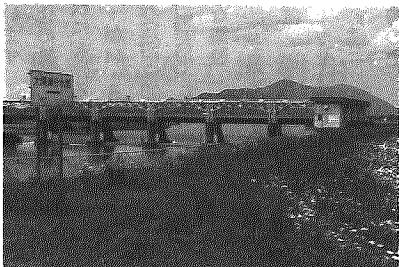
### 信濃川下流域を洪水から防ぐため、 鷲尾政直らは大河津分水の実現に尽力

大河津分水のおかげで、現在では大洪水の心配は昔ほどではなくなりました。しかし、大正末に分水ができてから、信濃川下流域では毎年のように洪水が起きています。分水のアイディアは江戸時代中期からありましたが、明治期に分水の実現に尽力したのが、鷲尾政直でした。

信濃川の治水のために大河津分水を造るといふ考えは、江戸時代中期の享保年間（一



大河津分水（山間部）の工事の様子（山間部右岸の掘削工事の様子）



七二六〜七三六、八代将軍吉宗の時代）から既にありました。しかし、それが本格的に動き出したのは、やはり明治時代に入ってからです。明治維新当時、黒島村庄屋だった鷲尾政直（中笠屋）や木場村庄屋だった山際郡司（山際七司の父）らが、大河津分水の実現のために奔走しました。そして、彼らの動きが実って、明治三（一八七〇）年五月から分水の工事が始まります。しかし、外国人技師が分水により信濃川河口の新潟港が損傷されると報告したほか、地元の人々にとっても費用がかかりすぎる（同じ西蒲原郡内でも洪水の影

響の少ない地区もあり、そこにも費用を均等に割りあてることに對して反発がありました。た、工事人足としての負担が大きすぎる、などのために、明治八年には工事は廃止に追い込まれます。このように分水の工事に對する動きも根強かったのですが、そうした動きは明治五年四月に大河津分水騒動（首謀者の元会津藩士の名から渡辺悌助騒動とも）となって激発します。分水工事の中止などをかかげて、農民らが柏崎県庁と新潟県庁へ押し寄せた事件です。

村吉江で彼らを押しとどめようとした板井村庄屋の萩野伝衛らが殺害される、という事態も起きました。首謀者の渡辺悌助や萩野らを殺害した農民たちはつかまり、さらし首や打ち首などに処されましたが、工事廃止に大きな影響を与えました。なお、この明治初期の分水工事について、もし通水が成功したとすると「信濃川の水は洪水時のみならず平常時もすべて直接日本海に流出してしまい、越後平野は潤湿してしまつたにちがいない」という評価もあります（大熊孝一「洪水と治水の河川史」平凡社一四五ページ）。

進められます。これにも鷲尾政直は尽力します。しかし、明治一九年〜三一年と三年続きで大洪水が続くなど水に悩まされ続けます。そのため、再び大河津分水工事の気運が高まり、明治四〇年には工事が始まります。そして、大正一一年八月二五日に通水、一三年には竣工式が行われます。こうして、大河津分水の完成により、下流の西・中蒲原地域は洪水からまぬがれることになったのです。鷲尾政直は大正元年に亡くなりました。大河津分水の完成を目にすることはできませんでしたが、すでに工事は始まっていたので、亡くなる時にはどのような感慨がよぎったのでしょうか。

### 町長に任意協議会設立の申し入れ

#### 11月18日、長谷川市長が来庁

十一月十八日（金）、新潟市の長谷川市長が合併の任意協議会設立の申し入れに来庁されました。市長は「速やかに任意の合併協議会を設立してほしい」と旨を申し入れ、これを受けて町長は「議会と協議しながら（任意協議会を）設立したい」と答えていました。この任意協議会は一般的に合併した場合の都市計画や福祉・保健衛生などの行政サービスはいかにあるべきかなどの将来の建設計画を、法定協議会の前に検討する機関で、自治体の三役、議員、学識経験者などで構成されます。町長は、このあと行われた記者



### 来春、鷲尾雨工の文学碑を

新潟県人として、ただ一人直木賞を受賞している小説家、鷲尾雨工は明治25年に黒崎町で生まれ、昭和26年に亡くなるまで60冊ほどの小説を書きました。「鷲尾雨工の文学碑を建てる会」（鈴木昭会長）では、大きな文学的業績を残したこの故郷の先達の文学碑を来年4月27日の、雨工の生誕日に建てようと募金活動をしています。場所は新潟ふるさと村か、図書館付近を考え、どちらかになるそうです。文学碑には直木賞受賞作の吉野朝太平記の原稿と、昨年、記念講演もされた尾崎秀樹氏（文芸評論家、日本ペンクラブ会長）の撰文が彫られます。募金の振込先は、第四銀行大野支店普通口座1201731 鷲尾雨工の文学碑を建てる会か大野町郵便局備え付けの振込用紙で。金額はいくらでも可。詳細は会員、教育委員会へお問い合わせください。



### 昭和21年木場水門完成記念の講演会③ 談・丸山和郎

この工事が九分どおり出来上がったところに、翌年六月の豪雨とアルプスから押し出した雪解け水が襲いかかり、一挙にそれが転覆してしまつた。伊集院が自分の無学と経費が無駄になった責任を負って死を決意した。しかし、平田は「この工事を、今自分たちが切腹して、以後やらないで済むならそれも良いが、誰かが後を継いでやらねばならない。だから、折角ここまでやったのだから、どうか以後の命はこの平田に預けて工事を続けてくれ」と説得し、再

千本松原で切腹 二人で協力して資材調達にかり、命がけで工事を再開した。住民はそれを見て「どうか私どもにも手伝わせてもらいたい」と言った。しかし平田らは「気持ちには有り難いが、あなたがたは生きていくのが精いっぱいというくらいに体力しかないのだし、それに、手伝わしてもらつては我々の面目にもかかわることだから、薩摩武士が引き受けた以上はあくまで薩摩の手で

完成させてもらいたい」と言つて引き下がらなかつた。こうして宝暦五年三月二十八日、工事は完成した。幕府からは検分役に細井九郎助、牧野織部の二人が来たが、検分には三十七日もかかった。二人はあまりの立派な工事の出来栄に、ただ褒め言葉だけでなく感涙にむせんだという。幕府引き渡しも終わって祝賀会という朝、平田と伊集院は一番の難工事だった揖斐川、木曾川、長良川の合流点、油島の千本松原に荒むしろを敷いて、遥か三百里かなたの故国の空を仰ぎ「工事は立派に終わったが長い年月を要し、しかも予算の倍も経費を使った。しかも、薩摩武士が使った藩財政を困難におとし入れたことは誠に申し訳ない、死をもってお詫びする」と、平田が短刀をおしただいて割腹した。（続く）



### 近代と自然の2巻が出ています

今回とりあげた大河津分水などに関する資料は『黒崎町史 資料編3近代』に収録。ほかに明治維新から昭和20年までの黒崎の政治・経済などに関する資料も収録しています。B5判897ページで、頒布価格は1冊5千円（税込み）。『黒崎町史 資料編5自然』も刊行されています。町内の動植物や気象・地質などの自然環境を、B5判オールカラー386ページにまとめました。頒布価格は1冊1万円（税込み）。どちらも、役場2階の町史編さん室で取り扱っています。お問い合わせは、☎377-3101 内線232か233までどうぞ。